大東市

開催レポート

発行：大東市 政策推進部 公民連携推進室

キックオフトーク

まちの保護者会

～子どもの学びを考える～

いま保護者の方、**かつて**保護者だった方、**これから**保護者になる方

【開催概要】

日時：2023年7月1日（土）　10:00～12:00
会場：大東市立市民会館 キラリエホール
主催：大東市 政策推進部 公民連携推進室
事務局：株式会社 コーミン

開催レポート

2023年7月1日、大東市立市民会館（キラリエホール）にて、公民連携教育事業の一環として、「キックオフトーク まちの保護者会 ～子どもの学びを考える～」と題したフォーラムを開催しました。
大東市が主催したこのフォーラムでは、様々な立場で子どもに関わる有識者をゲストとして招き、各視点から「子どもの学び」について大東市の活動やメタバースの可能性なども踏まえながらお話いただきました。
また、各セッションでは、来場者の皆様同士でも意見交換をしていただきました。
大東市では、公民連携教育事業を進めるため、これからも地域の皆様とコミュニケーションをとりながら取り組みを進めていきます。

イントロダクション　新たな学びの場について

大東市では、公民連携のまちづくりを継続的に進めていくため、「ひとづくり」と「まちづくり」を基本方針に据えた大東市公民連携教育の事業化に向けて検討を進めています。
誰もがどこにいても、個々の特性を伸ばし、学び続けることができる仕組みを、大東市で実現していくという構想です。

大東市

大東市では、満13歳から15歳までの中学生を対象とし、公設民営の新しい学びの場の開設を目指しています。
市が設置をすることで、民間のノウハウを生かしたカリキュラムがある新しい学びの場に、保護者の経済力に関係なく、大東市民であれば誰もが通うことができるようになります。
また、新しい学びの場では、探究学習を重視し、基礎学習はEdTech教材などを活用することで、効率的に行います。その結果、生み出された余剰時間を探究時間に充てることで、子ども1人1人の関心を深掘りする機会を提供していきたいと考えています。

入江氏

私が得意とするのはまちの資源を活かしたコーディネート力です。企業や、まちの自然や歴史などをたくさん使った学びを提案できるという強みを活かし、CoCoSchoolを提案しました。
あるときは、近所のお店のおばちゃんが先生だったり、またあるときは、町の工場で働く人が先生だったり、逆に先生が生徒たちに教えてもらったりなんてこともあってもいいのかなと思っています。
リアル･オンラインを併せたスクールとし、子どもたちが様々なことにチャレンジする中で、自分の好きとか得意、学校ではなかなか輝けない、でもこういう分野では輝ける、そういうキラっと光る部分を見つけて、そこを伸ばしていってほしいなと思っています。

コーディネーター

どんな**想い**をもって
教育をしたいのか
子どもたちを
育んでいきたいのか

瀬戸 昌宣（せと まさのり）
NPO法人SOMA 代表理事・株式会社 basecamp 代表取締役

生態学者。農学博士（農業昆虫学）。米国コーネル大学にて博士号を取得、同大学で研究と教育に従事。2017年にNPO法人SOMAを設立、「ひとが育つ環境をととのえる」をミッションに学びの環境づくりと自然環境再生事業に取り組む。これまで、主催する教育プログラム i.Dare（イデア）やミュージアムでの学びのプログラム「智慧の風」などが経済産業省「未来の教室」実証事業に採択された。

パネリスト

学校に
行けなくなる前から
様々な選択肢が
ある状態が必要

今村 久美（いまむら くみ）
認定NPO法人カタリバ 代表理事

慶應義塾大学卒。2001年にNPOカタリバを設立し、高校生のためのキャリア学習プログラムの提供を開始。2011年の東日本大震災以降は子どもたちに学びの場と居場所を提供、コロナ禍以降は、経済的事情を抱える家庭に対するオンライン学習支援やメタバースを活用した不登校支援を開始するなど、社会の変化に応じてさまざまな教育活動に取り組む。

パネリスト

学びの
グラデーション
が大事

水野 達朗（みずの たつろう）
大東市教育委員会 教育長

大東市教育委員会教育長。一般社団法人家庭教育支援センターペアレンツキャンプ創設者。2015年7月より教育委員に就任し、2020年5月には40歳で教育長に就任。2023年度の近畿市町村教育委員会連絡協議会の会長及び全国市町村教育委員会連合会の副会長を務める。中央教育審議会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会委員」や、こども家庭審議会「幼児期までのこどもの育ち部会委員」及び「こどもの居場所部会委員」等、国の有識委員を歴任している。

パネリスト

キラっと
光る部分を見つけて
そこを伸ばして
いってほしい

入江 智子（いりえ ともこ）
株式会社コーミン 代表取締役

京都工芸繊維大学卒業後、大阪府大東市役所に入庁。建築技師として、学校施設や市営住宅などの営繕業務に従事する。2017年に大東公民連携まちづくり事業株式会社（現コーミン）に出向、駅前道路空間を活用した「大東ズンチャッチャ夜市」をはじめる。2018年に市役所を退職し、現職。公民連携エージェント方式で市営住宅の建て替えを行なった「morineki」が2021年春にオープン、2022年「都市景観大賞」国土交通大臣賞、グッドデザイン賞を受賞した。

トークセッション 1　理想の教育について

同世代の4人の有識者に、自身が考える理想の教育について語っていただき、意見交換の中から今後の教育の在り方の変化や課題が見えてきました。
トークセッションの間に、来場者同士での意見交換もしていただきました。
皆さん積極的にお話しされており、大東市の教育が変わることへの期待が伺えました。

瀬戸氏

「教育」という同じ言葉使っていても、みんな全然違うことを喋っているということが毎回おこります。そこが教育について話す際の非常に難しいところだと思います。僕らはどんな想いをもって教育をしたいのか、子どもたちを育んでいきたいか。
自分が受けてきた教育とか、自分が考えている理想の教育みたいなものについて、パネリストに聞いていきたいと思います。

水野氏

朝起きたときに、今日は学校で何を学べるんだろうかと、子どもたちがワクワクするっていうのが理想の教育かなと思っています。私は、友達と会える楽しい授業があるということが「ワクワク」だったかな。
このワクワクする教育を追求していったときに大切なのは、今日学んだことが1秒後、10秒後、明日もすぐ役に立つ授業であったら、きっとワクワク感が高まるんじゃないかと思います。

入江氏

3人の子どもを育てているのですが、確かに大人にはリモートワークとか色々な働き方がありますが、子どもは、昔とあんまり変わってないんだなって思います。

今村氏

教育のテーマで一番課題だと思うのは私たちの親や私たちのように、今の若い人たちが親になりたいと思っていないということです。
そして若い人たちが学校の先生になりたくないって思うような時代になってしまっていることが、最も大きな問題だと思います。

瀬戸氏

昔は、学校に最新のものがありました。しかし今は、家庭にあるものが最新で、学校にあるものが「まだこんなの使ってるの！？」というような状況になってしまっています。社会がどんどん多様化し、変化していくスピードがあまりにも速いから、実社会と学校や教育現場の距離が開いていってしまって、課題が出てきているのかなと感じています。

トークセッション 2

こども基本法について

このセッションでは、前半は今村氏に、令和 5 年 4 月にこども家庭庁が創設されるのと同時に施行された「こども基本法」について説明していただきました。
「こども基本法」の詳細については、右記の QR コードよりご確認ください。
後半では、前半の今村氏の説明を踏まえて、教育の環境やシステムについて大東市の活動を交えながらお話ししていただきました。

瀬戸氏

これまでは、日本には子どもに関わるあらゆる場面で、子どもの権利が守られるべきと定める、軸となる法律がなかった。軸がないので、立ち戻る際に、私は教育基本法に戻る、私は学校教育法に戻る、みたいな形で、みんなの立ち戻る場所がバラバラでした。
要するに、GPS の座標がない状態で、みんなで地図を広げているような状況なんですね。
でも、こども基本法ができたことで、子どもの権利はちゃんと守られているのか、参画する権利は守られているのか、発言権は守られているのかなど、都度都度チェックして、大丈夫ね、じゃあ議論を進めようっていうことが、やっとできるようになってきました。

今村氏

今回、大東市の教育支援センターボイス※1 に初めて行かせていただいて、ボイスのリーダーの方とお話をさせていただきました。大東市の教育支援センターボイスには、「デイリーダー」という仕組みがあるとお伺いしました。
全国の 62% ぐらいの自治体では、教育支援センターという不登校の子どもたちを支援する居場所を設置しているのですが、全国的に多い形態が、退職された校長先生のような方が勤めておられ、それ自体が悪いわけではないですけれども、もう一つの学校みたいな雰囲気のところも多かったりします。しかし、大東市のボイスは、NPO だったり、不登校の支援をされている様々なジャンルの方々が日替わりでデイリーダーを勤めておられます。毎日コンセプトを変えて、特色ある対応をすることで、不登校の子どもが、自分に合うデイリーダーを選べる仕組みになっています。ここはとても素敵だと思います。

※1 教育支援センターボイスとは
学校に行きたくても行けない不登校状態が続いている児童生徒（小中学生）のための教室です。
大東市立キッズプラザ（大東市幸町 8-8）で開かれています。
今村氏が代表を務める、認定 NPO 法人カタリバが運営するメタバースを活用した不登校支援プログラム「room-K」を利用しています。

水野氏

よく私は学びのグラデーションが大事だと話しています。不登校の子どもたちは全国的にも増加傾向にあります。大東市教育支援センターボイスを、より強固で素敵な仕組みにすれば、大東の約 315 人の不登校の子ども全員がボイスに来ることができて、学びにアクセスできるのかというと、そうはいきません。大東市では、教育支援センターボイスだけではなく、家庭教育支援であったり、教育現場での ICT の活用や民間フリースクールとの連携、あとは各中学校小学校にボイスの出張所のような別室のスペースの確保など、子どもを支える仕組みを多層にしていくことが重要であると考えています。これからも出てくる新たな課題に対して課題解決型にするのではなく、課題解消型でやっていくというのが大切かなと思います。

今村氏

私は子どものエネルギー値っていうものに着目しています。学校に元気に行けるっていう平時の段階から、何らか環境的な理由で一旦ぐっとパワーがなくなってしまう時期、これは大人にもありますよね。
大人にも休職するっていう権利がきちんと付与されていて、産業医の方の診断でお休みするっていうことができます。
であれば、子どもも積極的に不登校になるっていう学習権の認め方はもちろんあってよいと思います。学校に行きたいんだけど、行けなくなってしまっているという段階があるんだってことをまず前提としたときに、お休みをするという権利を行使することが必要な場合もあると思います。

瀬戸氏

結局、子どもに合っているのか、合っていないのか、というのは大人が判断できることではなくて、子どもが実際に経験するっていうことを経ないと、それが自分に合ってるかどうかわからないんですね。

トークセッション 3

まちの教育 多様な学びの場について

多様な学びの場について語り合う中で、「そもそも子ども（ 人 ）は多様である」の言葉から、さらに深く刺激がある内容となったセッションです。

瀬戸氏

コーミンが今、「公民連携という形でこういった仕組み、仕掛けができるのではないか、やってみたい」というようなお考えは何かありますか。

入江氏

学校には行けているけれど、何かしら不満に感じている、思いを持っているといった「不登校予備軍」のような子もたくさんいると思います。そういった子どもたちのために、日中に通える公設民営のオルタナティブスクールを創ったり、もしくは学校の先生たちと協力して探求学習の部分をお手伝いするというようなことができるのではないかと思っています。

今村氏

どうしても不登校の話になると、「学校に行けなくなってしまってから、どうしようか」という議論にフォーカスが当たりがち。大東市の革命的な点は、「そもそもの選択肢を増やそう」という話をしている点です。
学校に行けなくなってから選択肢を考える社会ではなくて、最初から選択肢がある状態。
そもそも多様な子どもたちがすでにいるということを大前提に考えなければいけないと思っています。
（右記 QR コード参照：内閣府の総合科学技術・イノベーション会議）

水野氏

そもそも学校というのはすごく多様なもの。たまたまその地域で、たまたまその年に生まれた、いろいろな家庭背景のある子どもたちが集団として集まっている場です。当然、仲良くなる子もいれば、喧嘩をしてしまう子もいて、得意な授業もあれば苦手な授業もある。子どもたちの自立を育んでいくためには、こういった多様な環境で、多様な価値観に触れながら多くのことを学び、経験することが必要だと考えています。

瀬戸氏

大東市には「グラデーションを作る」という基礎があるため、今、そしてこれからの子どもたちが求め、そして彼らの育ちに必要な学びの場が次々とできあがっていくのではと期待します。

アンケート

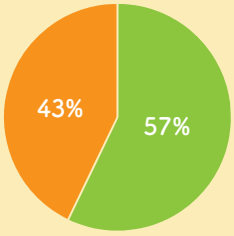
アンケート結果

【キックオフトーク　まちの保護者会～子どもの学びを考える～】では、来場者の皆様にアンケートへの回答にご協力をいただきました。今後も、地域の皆様とコミュニケーションをとりながら取り組みを進めていきたいと考えています。

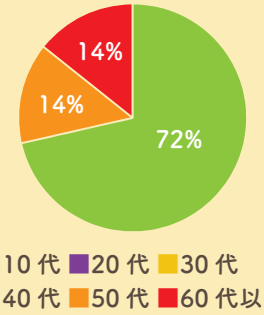
（出席者６５名のうち、14 名が回答）

参加者情報

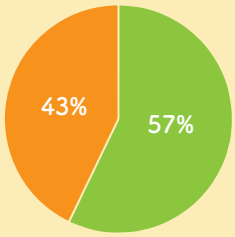
性別



年齢

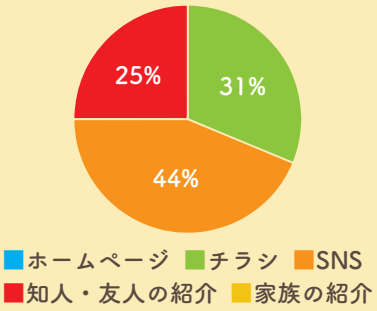


お住まいのエリア

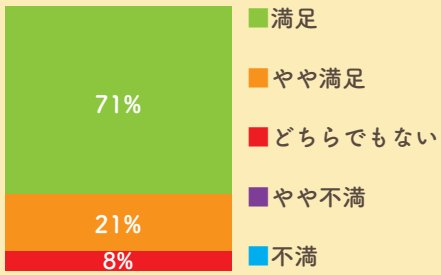


イベント関係

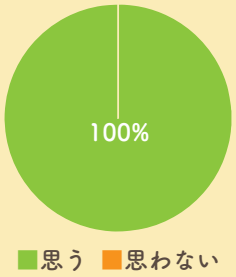
ご来場のきっかけ



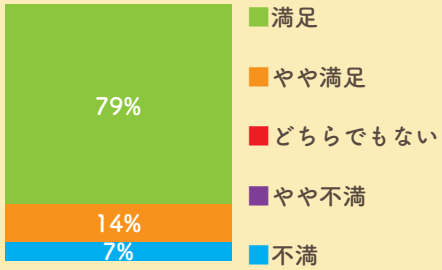
トークセッションについて



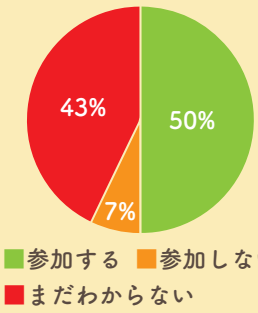
あなたは大東市に多様な学びの場が必要だと思いますか。



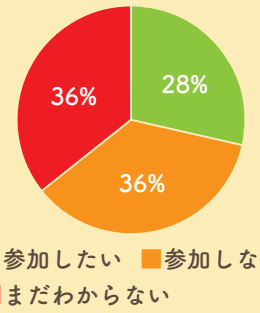
総合的な満足度



「ミニまちの保護者会」に参加を希望しますか。



「お試しスクール」に参加を希望しますか。



自由記述

今回のトークは不登校になってからの視点が多かったように思いますが、そのギリギリのラインで揺れ動く保護者、そして自分の保護者にも言えない子どもたちが思いのほかいることを、最近身近で感じることが多いです。

大東市の本気度が伝わりました。私は大東市民ではないのでどうやって自分の住むまちに取り入れられるかを探っていきたいと思いました。それぞれの活動の枠に固執せず、柔軟に連携する姿勢が素晴らしいと思いました。

教育改革への挑戦を止めないためには、大人がその必要性を認識しないといけません。子どもたちに直にアプローチできる学びの機会を作るのと同時に、すでに大人になってしまった、かつての子どもたちの心が育ち直す必要がある。

学校に馴染まない子どもたちの受け皿として苦しんでいるのが、「出席扱いにはできるが、成績評価に繋げるのが困難である」という点です。是非ともチャレンジいただき、地方のランドマークになっていただけることを期待しています。

当日の様子

動画配信について

【キックオフトーク　まちの保護者会～子どもの学びを考える～】の当日の様子を YouTube にて配信しています。当日お越しになれなかった方々もぜひご視聴いただき、これからの【子どもの学び】を一緒に考えていただければと思います。

ご視聴は、右記 QR コードよりお願いいたします。